

入吉市、飛騨高山(内藤くすり博物館での研修を含む)、東京都、高木兼寛先生生誕地(高岡)、串間地区、長崎市(オランダ修交四百年記念)となっている。

この本を拝見してまず感ずるのは、よく二十二年間も続いたなあということである。それには医師会の職員が運営に協力された由であるが、熱心な中心役員だけではとても二十二年も続くものではない。二〇回に及ぶ医史跡探訪旅行はこの懇話会の目玉であったが、ほぼ廻りつくした感もあり、この会の設立推進者であった内田、田代両先生の他界もあって、今後は形をかえて再発足するようである。

「二十二年の歩み」をコンパクトにまとめられたことは全国的にみて大変有意義なことで、各地の医史学会支部、研究会、懇話会等では宮崎県の大きな経験に学ぶことが出来よう。ご一読をおすすめる。洋数字の一部に誤植あり、ご注意。

(中西 淳朗)

〔宮崎県宮崎市橘通東四一三二二、電話〇九八五―二九一―二八六六、二〇〇一年七月三十一日、A五判、一八八頁、非売品〕

### 編集後記

日本医師会雑誌・第一二六巻第一〇号(平成十三年十一月十五日)に、東京大学名誉教授出月康夫氏(外科学)の「二重投稿と不正投稿」という講演録が載った。それによると、「他の雑誌に同じ内容の論文を投稿したことはない」旨の誓約書を提出しているのに、いまだに二重投稿や不正投稿が跡をたたないという。本誌でも平成十二年度に一件発生している。査読による審査を行って編集作業に入るわけであるが、委員は大変神経を使っている。学会によつては誓約と同時に、著作権の学会帰属の承諾まで行うところがある。これはどうも複写権の問題とからんでいるようである。ともかく本誌の投稿規定第一項にあるごとく「医史学研究に貢献しようもので他誌に未発表のものとする」のであるから、当委員会としては投稿時の誓約書までは取らず研究者としてのモラルを信ずる方針でいくことになった。査読して下さる方もご苦勞であるが、編集委員もきつい仕事である。(中西 淳朗)